

# 教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 7年 10月 20日

氏名 西村 あずさ

所属 教育心理学 コース

指導教員名 遠藤 利彦 教授

1. 研究課題 Children's "Agency" as perceived by Nursery Teachers

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 7年 9月 18日 ~ 令和 7年 9月 20日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

## 4. 学術活動

国外 国内

①英語論文公表

②研究科教員の研究プロジェクト参加

③フィールドワーク

④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑥研究指導委託

⑦留学

⑧国際研修

⑨国際インターンシップ

⑩その他 (具体的に: )

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表  
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加  
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク  
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修  
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ  
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<p>参加形式：研究発表</p> <p>学会名：国際幼児教育学会第46回大会</p> <p>国名・都市名：アメリカ・ロサンゼルス</p> <p>発表題目名：“Children’s “Agency” as perceived by Nursery Teachers”</p> <p>発表形式：口頭発表</p> <p>発表年月日：2025年9月19日</p> <p>学会・会議名：国際幼児教育学会</p> <p>発表内容等の概要：</p> <p>保育所保育指針や幼稚園教育要領において幼児の主体性(Agency)が注目されているが、その定義は曖昧で具体的にどのような保育、教育が子どもの主体性の育ちにつながるのかについて明確な方向性は定まっていない。そのため、それぞれの保育者がどのように主体性を育てば良いのかについて解釈し、実践が行われている現状がある。本研究ではまず先行研究を調べることで、主体性がどのように捉えられてきたかを概観した。その後保育者が子どもの主体性をどのように捉えているのかについてインタビューを実施し、質的分析を行なった。その結果、「自分から動く」と「他者への意識」という2点にまとめられた。従来、国の指針などで注目されていたのは「自分から動く」という姿勢である。しかし、保育者は保育園を他者と生活する場として意識しており、他者のために動くこと、他者を思いやることが主体性の表れとして捉えていることが明らかになった。また、「自分から動く」と「他者への意識」のそれぞれに多くの概念が包括されていた。例えば、社会性が「他者への意識」に含まれていることが明らかになった。これらの結果から、保育者が意図している主体性は一つの定義として示すことはできず、そのほかの能力とも密接に関連していると言える。本研究では保育者の捉える主体性を概念図としてまとめ、どのような関係性にあるかを示した。この概念図から、全国の保育者が主体性について他の保育者がどのように認識しているかを知ることができ、保育における主体性の捉えた方に一定の方向性をもたらすことができた。</p>	

(注) ① 年月日は西暦で記入してください。

- ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
- ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
- ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

## 6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

今回の国際幼児教育学会への参加では、学会開始前日に現地の保育園、幼稚園を見ることができる研修が行われた。1日の中で3箇所の幼児教育施設を周り、文化や宗教による考え方が違う中でも子どもを中心に、子どもの利益を考えた幼児教育が行われていた。特に重視されていると感じたのは、職員の個性が幼児教育に反映されるということである。それぞれの職員に得意、不得意なことがあり、クラスルームの中に教師の色が見られることが特色として挙げられる。また、「自然との活動」などの特定の活動に対して、専門の職員が在籍しており、場所の管理、子どもの遊びの発展のために働いている様子も伺われた。このように、それぞれが得意とすること、楽しいと感じることを子ども達にも直接伝えている環境はアメリカの文化を感じる場面であった。日本の保育はチームで行うことが多く、季節の移り変わりや年間の行事に敏感であり、どのクラスでも同じ時期には同じ製作が行われていることが多い。日本では羞恥心から自分の好きなものを好きとは公言しない風潮もあるが、子どもの発達の中で大人も自分の好きなものを認め公にしているという姿を見ることは、自己肯定感の上昇などに繋がりうるのかもしれないと感じた。

口頭発表の際には、国籍問わず20名ほどの方に聞いていただいた。発表の中で、私は主体性を agency に置き換えた。質疑応答の時間に、アメリカの幼児教育に携わるスタッフの方が Agency という言葉が明確になっていないという話がよくわからないと質問をいただき、アメリカでは Agency という概念について一定程度の共通理解ができていないのかもしれないと感じた。また、Agency という言葉を使用したことにより、主体性の意味が伝わらなくなってしまい、主体性と Agency は異なる概念として扱わなければ国外の方に発信する際には、その認識の齟齬により話が展開していかないという限界も感じた。今後、自身の研究を英語化したり、英語で発表したりする際に Agency を訳語として使用するのか、主体性という言葉そのまま使用するかについても一度先行研究などを踏まえて考えたい。

今回の学会に参加したことで、日本国外問わず多くの幼児教育に関わる方（現場職員の方、研究者の方）と交流することができた。発表の場だけでなく、食事の時間などにも自身の興味関心や研究についてざっくばらんに話しすることができ、新たな視点を獲得することができた。自身の中では、完結していると考えていた箇所についても新たな課題を見つけることができ、より深く考えなければいけない箇所や、時代の流れや文化によってみる視点を変えなければならない可能性についても知ることができ大きな収穫となった。